

仙人通信 93 横尾山(1818M)・高登谷山(1862M)

横尾山・高登谷山・女山・飯盛山の一連の山並は関東山地の西の端に位置し、岩村田 若御子(佐久・千曲川・野辺山・須玉) 断層に区切られた第4期の火山噴出物からなる山である。

今回は信州峠からの横尾山ピストンと高原別荘地の野外ステージ横に車を置いての高登谷山を廻る約6時間強のコースとした。

信州峠からの登りは、青空に唐松の新緑が映えて何とも清々しい。地元の人々の御尽力だろうか登山道の両側の草は除かれ歩き安い。一面に敷き詰められた唐松の落ち葉には、タチツボスミレ・アケボノスミレ・サクラスミレが咲き出迎えてくれる。唐松の新緑に混じり、タムシバやオオカメノキ(ムシカリ)が頭上で白い花を彩どる。最初のピーク近くでは、白い小さな花を付けたエンレイソウやチゴクリが可愛い。50分も登るとカヤトの原となり、視界が広がる。

富士山・農鳥・北岳・甲斐駒・手前の鳳凰・木曾駒・八つの赤岳・編笠等の雪の冠を付けた山々。そして東側には奇岩の瑞牆・金峰や堂々とした小川山である。足元には3cmにも満たないフデリンドウが小さな紫の花を一面に敷き詰め、南に富士川・北側には千曲川の基点である、日本列島中央の分水嶺を作る尾根だ。最初のピークの手前ではアズマギクがピンクの群落をサクラスミレに混じり咲く。痩せた岩尾根では、5cmほどの茎に小さな白い花を付けたヒメイチゲが壊れそうで痛々しく、そっと包んでやりたいようだ。カヤトの原から50分ほどでコザクラの咲く山頂に辿り付く。木々の梢が多く山頂からの展望は、誉められたものでないが、目の前の甲斐駒がいい。登り始めから約2時間50分で信州峠に戻り、高登谷山に向う。別荘地の先の標識に従い、登山道に入る。ミスナラ中心の登山道は、訪れる人もなく落ち葉に埋もれた尾根筋で、ほぼ直登の急な登りであるが、鳴き始めたカッコ-の声に元気を貰い進む。日当たりで土が乾いている性だろうか、横尾山とは対照的で花は岩陰に咲くスミレだけだ。右手に瑞牆の大ヤスリを眺め登ること80分で3等三角点のある小さな草原の山頂である。富士山方向は霞み・期待してきた八ヶ岳の大展望も梢へ越した。眼下の畑には、高原野菜のための、白く光るビニールシートがモザイク状で見事だ。嘗て八ヶ岳の東山麓に広がった巨大な湖を、そのシートに見た気がした。横尾山から女山へと繋がる尾根は、逆光で黒ずみ長閑な眺めである。天狗岩に向かう尾根のピークに立つと瑞牆や金峰が目前に望めるも、手前にある送電線が画面を右下から左上に走り、日の光を反射してしまう残念な光景だ。

その時、黄色いモンシロチョウほどの蝶が現れて、小生の周りを一回りして、唐松の梢の中に消えていった。不思議な気持で消えた先に目を凝らすとピンクの大きめの花を付けた山桜が見事に咲いていた。谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」の終章に出てくる西坂本の桜の情景を思い起し、20年以上前に亡くなった我母への思いと重なった。「ホー・・・」。15分程で最後のピークとなり、三つ葉躑躅であろうか赤紫の花の穂先を見ながら、わらび山荘に向う道標に従い、下山コースを取る。この6時間20分の山旅の最後に、異常気象の寒さで遅れた春の中に、忘れかけたか自分を見出した、ただただ感謝の山旅でした。(h22・5・21)

瑞牆山



山頂



ヒメイチゲ

